

3章 「工夫する」

カエルを飼おう ～関わりを生み出す工夫～

興味や目的を共通にして遊んでいる、「子ども同士の関わり」を活発にする工夫をすることで、子ども同士が相互に刺激し合う関わりが生まれ、「科学する心」が育まれる体験に繋がります。この事例では子どもたちは、子ども同士が互いのよさに気付いて関わりを深めたり、新たな関わりを生み出し広がったりすることで、人との関わりが豊かになり、思いを伝え合い、考え合う協働性が育まれています。

学校法人くるみ学園 認定こども園 くるみ幼稚園

5歳児

4歳児の時の飼育体験を踏まえ、今年度、5歳児になった子どもたちが、命と関わる体験に注目し、人や生き物との関わりが豊かになるように、クラスの枠を越えて主体的に関わる保育の工夫を図った。

展開1 「カエルの命」と「飼育」(カエルを飼いたい) 前年3月～5月

保育の工夫

4歳時、3クラスで飼育していたカエルが死んでしまった。その中の1匹の死には、子どもたちは気付かなかった。ある日、飼育ケースの中にそのカエルの死骸を発見し、「カエルが固まっている!」と、4歳児クラスみんなが大騒ぎになった。「かわいそうなことをした」「次はもっと大切にする」と言う子どもや、「恐竜みたい」「すごい」と話す子どもなど、命に向き合う姿には、子どもにより違いが見られた。

保育者は、子どもからカエルの死骸に気付くように、効果的な機会を捉えて環境を設定する。

クラスの別なく、4歳児がカエルの死を悲しみ、死骸に驚く体験を共有する場面を大切にする。

カエルの存在が、学年全体の交流の糸口になるように考え、保育者間で共通理解を図る。

クラスの実態や、「カエル」や「命」への一人一人の思いの違いを踏まえて、学年全体の課題として取り組む。



進級した5歳児クラスでは、3組が死骸を保存することになった。

5歳児クラスになる。5月上旬、2組のAさんが休み中に捕まえたカエル8匹を園に持ってくる。この日から、5歳児の他の2クラスにも情報が流れて大きな話題になり、1組、3組の子どもが、「カエル飼いたい!」と話し合う。1週間後、1組が、「カエルを2～3日貸してください」と2組に言う。3組は、「カエルが欲しい」とお願いをする。1組、3組それぞれの子どもの言葉から、飼いたい気持ちが伝わった2組は、「死なないように大切にしたい」「心配になったら見たり教えたりする」ことを話し合った。3クラスのカエルの飼育が始まる。

展開2 他のクラスの情報を自分の言動に結び付ける(カエルは何を食べる) 5月中旬～7月下旬

1組 誰かが、毎日餌を持参する。餌を食べる瞬間を見た子どもがいない。

2組 カエルの餌や、餌にする生き物の特徴などが、子ども同士で話題になる。餌の種類が増える。

3組 「オタマジャクシはパンを食べるから、カエルも食べるのでは?」とのCさんの話から、**パンを餌にする。観察するが食べない。今まで通り、生餌にする。**

保護者にカエルの飼育の様子を伝える。

図鑑や絵本の設定、関連する情報の掲示をする。動画を観る機会をつくる。

1組 3組から、餌にする生き物や、餌を食べる瞬間を見た話を聞く。**2組にカエルの様子を見に行く。**餌の生き物に嫌な気持ちをもっていた子どもが、「自分も捕まえてカエルが食べるところを見てみたい」と思うようになってくる。

クラスの枠を越えて子ども同士が情報を交換し、刺激を受けて話し合ったり、自分もやってみようと考えて行動したりする姿を見取る。積極的に世話をする原動力になっている実態を保育者間で共有する。



1組 カエルの**成長や色の変化が話題になる。跳ぶ、泳ぐ、壁につくなどの動きに注目する**ようになり、忍者のようだと話す。

2組 カエルの家の**臭いが問題になる。1組から臭くならない工夫を教わる。木を定期的のように使い、身体測定をする。**

3組 **緑色のカエルが茶色に変色する。「石の上にいるから」など疑問になる。**2組に、「大人になっているか、弱っているかのどちらか」と教わる。**飼育場所の色を気にしながらカエルを観察する日が続く。**7月、緑のカエルになる。

保護者会で、カエルの飼育の活動の様子を伝え、共有する。

[考察] 同じ学年でもクラスにより違う実態を踏まえ、保育者は子どもに寄り添い、子ども同士が考え合う保育を進めた。クラスの枠を越えた子ども同士の関わりを大切にしたことで、友達と関わったり、思いを表わし伝えたりする機会が増えた。その関わりや情報の行き来により、カエルなどの生き物との関わりや、生態や飼育に関する学びの機会が増え、「科学する心」が育まれる体験の積み重ねになった。